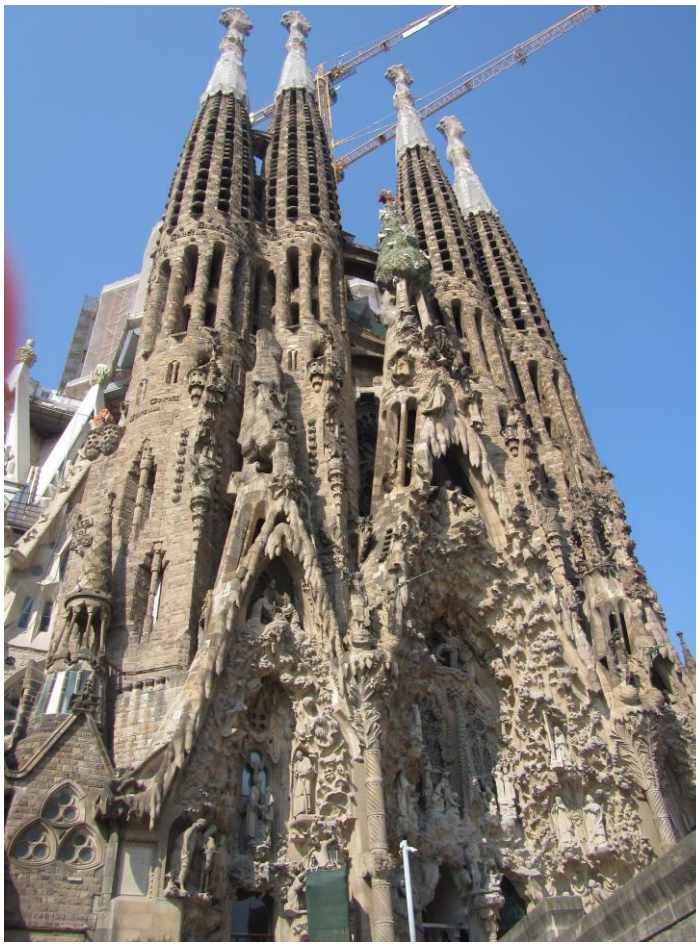
南蛮の風紀行－26　黄昏時のランブラス通り

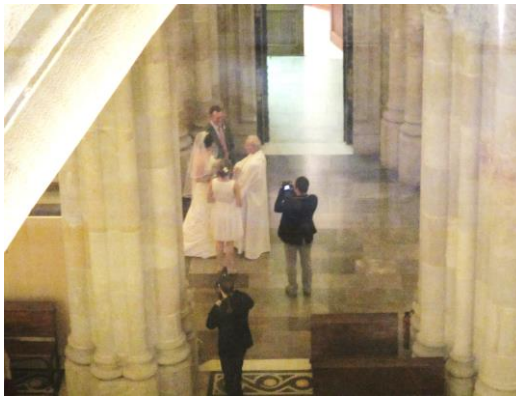


今度の旅ではガウディは目的にしていませんでした。それでもバルセロナに来た以上、世界遺産を見ないわけには行かないと勇んで出かけたのですが、見事に肩透かしを食らってしまいました。聖家族教会（サグラダ・ファミリア）は工事の関係で塔に登れず、カーサ・ミラも外装修復中でした。外からは、足場に掛かったシートしか見えません。カーサ・パトリオはシェスタ（昼休み）中で入場者たちが長い行列をしています。まぁ、それほどモティベーションが高いわけでもありません。結局そこも外観だけであきらめました。

それでも、一つだけガウディに報われたのは、聖家族教会の地下礼拝所で結婚式が行われていたことです。お蔭でこの世界遺産である大聖堂もバルセロナの人々にとっては、日々の生活の中の一舞台であるという、考えてみれば当たり前のことを、垣間見ることができたのです。

それにしても失敗したのはバルセロナ市内観光をツアーにしなかったことです。個人で回るのに便利な地下鉄網が広がっていることに安心して個人で回ったのですが、ここが世界的な観光地で、しかも今がヨーロッパのバカンスシーズンであることを忘れていました。聖家族教会では２時間行列に並んで、次の日の午後の入場券を手に入れるという過酷さです。家内と二人ですから何とか時をうっちゃることができますが、行列に並んでいる時にはまばゆいばかりの地中海の夏の日差しも、さすがに恨めしかったです。

ただ、バルセロナはやはり行く価値があります。わたしを十分に満足させてくれたのです。まず第一にわたしたちが投宿したホテルが面しているのランブラス通りの、中ほどにあるサン・ジュセップ市場です。わたしは世界中どこに行ってもその町の公設市場に行く



式が終わって司祭から祝福を受ける新郎新婦、わたしのいるフロアより一つ下の地下礼拝堂ですが、垣間見ることができました。

ことを忘れません。その国の人々の食生活に対する姿勢や食文化を知ることができるからです。そして、このサン・ジュセップ市場はわたしにとって世界中で最も素晴らしい市場の一つになりました。

サン・ジュセップ市場には、ランブラス通りからそのまま入れます。

野菜、果物の種類の豊富さ、新鮮さ、品質の良さは言うまでもありません。もちろん生ハムコーナーを始め精肉部も充実しています。しかし何と言っても鮮魚店です。並んでいる魚の鮮度は日本並みで、全ての魚を刺身にできると言っても過言ではありません。日本以外の国で、そんな公設市場を見たのは初めてです。もちろんマドリッドもトレドも市場の魚の鮮度は抜群でしたが、ここには一歩譲らざるを得ないでしょう。並んでいる魚の全てが刺身になるということがどれほどすごい事か、ピンとこない方もいるでしょう。

例えば中国の奥地ウルムチの市場では、生きている魚（ナマズ類のように生かしておける魚）か、日本人にとっては腐った魚（これがほとんどですが）しかありませんでした。そしてその状況はニューヨークのマンハッタンにあるフルトン市場も同じようなものですし、アマゾンのマナウスの市場でも刺身になるくらい新鮮なのは全体の１割くらいなのです。スペインのレベルが高いのは、やはり魚を生で食べる文化があるからでしょう。煙が出るほど温度の油で骨まで食べれるほど過熱するのであれば、鮮度がおろそかになるのも仕方がない事なのでしょう。

ランブラス通りはカタルーニャ広場と海際のコロンブス広場を結ぶ約１．２キロメートルの通りで、道幅の３０メートルの両側に３メートルずつの舗道、その内側に２車線ずつの車道があるのですが、真ん中の１０メートル幅は歩行者専用になっています。大きな樹木がたくさん植えられていて、昼間は心地よい日陰を提供してくれていました。わたしたちが訪ねた時は真夏で、昼の長い時期でしたので、市場が閉る時間になっても外はまだ薄明るく、公園かと見まがうほど緑の多い通りには、夕涼みをしたり犬を散歩させたりしている地元の人も多く、土産物屋の屋台やところどころにいる大道芸人をひやかして歩く観光客でごったがえしています。

熱帯系の果物の種類も豊富で、食べたいものばかりでした。

始め不思議に思ったのはコロンブス広場にあるコロンブスの塔です。内部にエレベーターがあって登れるようになっている立派な塔の頂でコロンブスが海を見ています。１８８８年にこのまちで開かれた万国博を記念して建てられたのだそうですが、この地に何の縁もゆかりもない（とわたしは思っているのですが）イタリア人のコロンブスの銅像があるのかわたしには理解できません。その答えは実はセビリアで得ることになるのですが、わたし自身はコロンブスにあまり良い印象を持っていません。

当の上のコロンブスは右手で水平線の彼方を指さし、左手には彼が初めてヨーロッパにもたらした煙草を吸うためのパイプを握っています。

１５世紀当時のヨーロッパ人にとって、それが当たり前だったと言えばそれまでですが、結局のところ、コロンブスがやったことといえば暴力による西インド諸島の占領と略奪でしかありませんでした。彼に続くコルテスやピサロに至ってはアステカやインカという文明さえ破壊したのですから、その後の中南米の悲惨な歴史を思えば、この贅を凝らした素晴らしい塔の上に、誇らしげに立っているコロンブスには納得ができません。

とはいえ、明日はいよいよバルセロナに別れを告げて、セビリャに向かいます。スペインの誇る新幹線ＡＶＥの座席指定はこのまちに着いた日に手に入れていますので安心です。ついでに訪れたつもりのバルセロナでしたが、なんとなく名残惜しい気がするのはなぜでしょう。コロンブスの塔の周りの雰囲気に、もう少し溶け込んでから黄昏というには少し時間の下がったランブラス通りをぶらぶらしながら、ホテルに戻ることにします。